

灌注専用殺虫剤による白ねぎ主要害虫に対する防除効果

1. 目的

高品質の白ねぎ栽培を行うには、効果的な害虫防除が必須となっており、県内の生産現場では、使用薬剤の選定が行われ、定植前後の害虫防除には粒剤が使用されている場合が多い。一方で近年は、従来の粒剤処理に比べ省力化が見込める灌注専用剤の使用が注目されている。

そこで、定植時の使用薬剤として新規導入を検討している灌注専用殺虫剤について、白ねぎの主要害虫に対する防除効果を検討した。

2. 調査方法

1) 試験区の概要

(1) 試験場所：西予市大江

(2) 供試作物（品種）：白ねぎ（冬の宝山）

(3) 供試薬剤：ベリマークSC 400倍 0.5l/枚（チェーンポット、58×28cm）

(4) 処理月日：定植時（2021年5月14日）に所定の濃度に希釈した薬液を灌注

(5) 処理区：

試験区（ベリマークSC 灌注処理） 反復なし

慣行区（ガードベイトA 3kg/10a、定植時株元散布）

無処理区

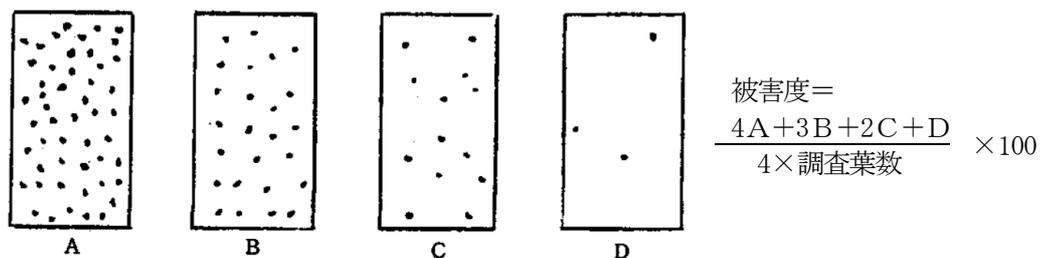
(6) 対象害虫：ネキリムシ、シロイチモジヨトウ、ネギコガ、ネギアザミウマ、ネギハモグリバエ、ネギアブラムシ

2) 害虫発生調査

5月25日（薬剤処理：11日後）、6月7日（24日後）各区任意の100株について調査した。

ネキリムシ、シロイチモジヨトウ、ネギコガについては被害株数を、ネギハモグリバエについては被害度を、ネギアザミウマについては中央3葉の寄生虫数を、ネギアブラムシについては寄生虫数を調査した。

6月18日（35日後）、ネギアザミウマの被害度を下記の被害基準（病虫害の発生予察事業の実施について～発生予察事業の調査実施基準～、平成13年3月、農林水産省生産局植物防疫課P.353～354）により、各区100株の最大被害葉について見取り調査し、被害度を算出した。



3. 結果の概要

ネギアザミウマ、ネギアブラムシの発生がみられた。その他の害虫については発生が確認されなかった（表1）。

(1) ネギアブラムシについては、寄生虫数が少なく、効果判定はできなかった（表1）。

(2) ネギアザミウマの寄生虫数は、処理11日後に無処理区との効果差が見られた（表1）。処理24日後には、両区の発生は同等となったが、ベリマークSCの効果持続期間は3～4週間のため、防除効果が低くなったものとみられる。

(3) ネギアザミウマについて、処理35日後の試験区では、慣行区及び無処理区に比べて被害度はやや低くなった（表2）。

表1 白ねぎにおける灌注専用殺虫剤、ベリマーク SC による害虫の発生抑制効果

処理後	ネキリムシ (被害株数)	シロイチモジヨトウ (被害株数)	ネギコガ (被害株数)	ネギアザミウマ (中央3葉虫数)	ネギハモグリバエ (被害度)	ネギアブラムシ (虫数)	ネギアザミウマ の補正密度指数
試験区	0	0	0	7	0	2	17.9
慣行区	0	0	0	7	0	3	17.9
無処理区	0	0	0	39	0	1	100
試験区	0	0	0	77	0	3	86.5
慣行区	0	0	0	60	0	3	67.4
無処理区	0	0	0	89	0	4	100

表2 白ねぎにおける灌注専用殺虫剤、ベリマーク SC によるネギアザミウマの発生抑制効果

	被害基準				被害度
	A	B	C	D	
試験区	3	28	43	26	52.0
慣行区	15	37	38	10	64.3
無処理区	20	35	37	8	66.8

$$\text{※被害度} = \frac{4A + 3B + 2C + D}{4 \times \text{調査葉数}} \times 100$$

処理 35 日後の調査結果。